

「オネエ所長の調査ファイル」 # 3 4

山崎浩治

「あたしは大和撫子だから白無垢に綿帽子の花嫁衣装に憧れるけど、着るならやっぱり、ウエディングドレスがいいなあ」

「おっさんが文金高島田にしたら力士の大銀杏に見えるもんな」

「ドレスはシンデレラ気分を味わえるプリンセスラインが第一希望。だけど背が高くてスレンダーなあたしには、マーメイドラインが案外似合うかも。うふふ」

「そういえば、白いベールを被ったおっさんがウエディングドレスを着てバージンロードを歩いている夢を見たよ」

「いやん、なんて素敵な夢なの！」

「誓いの言葉と指輪交換の後、新郎がおっさんのベールを上げた瞬間、教会で音楽が高々と鳴り響いたわ」

「パイプオルガンの美しい調べね」

「いや、鳴ったのは――♪ジャンジャンジャーン！ ジャンジャンジャーン！」

「どうしてそこで火曜サスペンスのテーマ曲が流れるの！」

「ベールアップしておっさんの顔が現れたら、戦慄のサスペンスだからな」

「金沢プライベート・リサーチ」でオネエ所長の市山とツンデレ調査員の沙織が雑談をしていると、「失踪した息子の嫁を探してほしい」という金沢市内に住む久子(71歳)がやってきた。

10年前に夫を亡くした久子は一人息子の会社員・拓(42歳)と二人暮らし。その拓が1カ月前、見合いした東京在住の派遣社員・美咲(37歳)とハワイ・オアフ島のチャペルで結婚式を挙げた。ところが美咲は帰国後、「東京にある賃貸のワンルームマンションを整理してくる」と言い残して帰京したきり、音信不通になったという。美咲の携帯電話に連絡しても「この番号は現在使われておりません」とメッセージが流れるだけだ。表情に疲労の色をにじませた久子に、市山が尋ねた。

「彼女の東京の住所は分かるの？」

「『もう引き払うから』って教えてもらっていないんです」

「勤め先の会社は？」

「それも『結婚を機に退職するから』と」

市山がため息まじりに言った。

「つまり、あなたの息子さんは正体不明の女と結婚したわけね」

◇ ◇

「結婚式に母親の私も呼んでくれないし、あの女にはどこか油断ならないところがあると思ってたんですよ。でも、どうしても息子が結婚したいって言い張るから……」

拓は友人や身内を一切招待せず、二人だけで海外挙式を執り行っていた。久子がハワイで撮影した婚礼写真を取り出す。中の1枚に純白のAラインのウエディングドレスを身にまとい、ブル

一のバージンロードを歩く花嫁が写っているが、美咲の顔はベールに隠されてよく分からない。「息子は口下手で引っ込み思案ですが、まじめにコツコツ仕事をするタイプです。酒もタバコもギャンブルもやりません。女性の話をしたこともないから、もしかして同性愛かもしれないと疑ったことさえあったんですよ」

別の写真を見ると、外国人牧師を前に緊張した面持ちで花嫁に指輪をはめるタキシード姿の拓の姿があった。久子が続ける。

「息子はこれまで結婚相談所や役所が主催する合コンにも出席したけれど、成果はありませんでした。やっと結婚までこぎ着けたのが、嫁だったんです。このチャンスを逃したら、もう結婚できないかもしれない。正直、私はそう思っていました」

「話はだいたい分かったわ。いま何よりもすべきは、息子さんの戸籍を確認すること。息子さんはまだ入籍していない可能性が高いと思う」

久子がぎょとんとした表情で口を開いた。

「そんなはずはありませんよ。息子は正式な結婚式を挙げたし、牧師さんから結婚証明書だってもらっているんですよ」

「結婚式を挙げたからって入籍してるとは限らないでしょ。息子さんが使った結婚式場がキリスト教信者じゃなくても挙式できるチャペルなら、法的な効力はないわ。以前、既婚者でありながら愛人と海外挙式をした国会議員がいたけれど、式を挙げたこと自体、罪に問われていないのはそのためよ。結婚証明書だって単に式を行ったことを証明する形式的なもので、入籍を意味するものではないの」

「そ、そんな……」

久子の顔から血の気が引いた。その日、拓の戸籍を確認したところ、市山の推測通り、婚姻届は未提出で、拓は戸籍上、独身のままだった。

◇ ◇

勤務先は「働き方改革」なんて無縁の会社で、残業は連日夜10時、11時に及んだ。仕事に追われて、とても結婚する気になれないまま、気がつくやうに40代、母は70歳を過ぎていた。

母一人子一人の我が家でいま、母が倒れでもしたら、介護は自分がすることになる。結婚するならおふくろが元気なうちに。もしも介護するようになったら結婚は絶望的だ――。そんな危機感が募って結婚相談所や行政の婚活イベントなどに参加、紹介された10数人の女性と軽くお酒を飲んだり、話題のスポットを訪れたりしたが、これといった相手は見つからない。そんな時、とある結婚情報サービスを介して紹介されたのが東京に住む美咲だった。

美咲は高校生の時、交通事故で両親を失っている。アルバイトをしながら大学に通い、卒業後に就職した会社で社内結婚、寿退社したが、1年で離婚した。原因は夫の浮気だったという。子どもはいない。

「これから一生、一人で暮らすのは寂しいというより、不安です。離婚して派遣社員になった私は老後、年金だけで生活するのは正直、厳しい。結婚することで安定した生活を手に入れたいと

思いました。それに出産を視野に入れたら、いまの年齢がラストチャンスかな、って」

金沢駅近くにあるホテルの喫茶室で初めて会った時、美咲が率直に語った。そんな性格が好ましく思え、ややぽっちゃりした体型、お世辞にも美人と言えない容姿に安堵した。自分にはこれくらいが分相応、と思ったのである。

美咲は石川県に血縁も仕事上のつながりもないが、去年、北陸新幹線に乗って金沢を訪れた際、自然や文化に魅了されて「こんな土地に移住したい」と思い立ち、相手男性の条件を「石川県在住の男性」にしたらしい。

これまで拓が会った女性は「結婚後、母と同居」と口にした瞬間、波が引くように態度を豹変させたが、初めて会った時、美咲は「義母さんと同居してもいい」と語った。

「私は早くに亡くなった両親に何もできなかったから、義母さんとは一緒に暮らしてお世話をしあげたいんです。介護だって別に厭いませんよ」

その言葉で結婚を決意した。2回目のデートで男女の関係になり、3回目のデートで「結婚して下さい」とプロポーズ。即答で承諾してくれた美咲は「私はバツイチだし、派手な結婚式は嫌。ハワイで二人だけの結婚式を挙げたい」と海外挙式を提案した。その後、旅行会社を相手に式の段取りをすべて行ったのは美咲である。

「ハワイ到着初日は時差ボケと眠気との戦いなの。2日目は顔がむくんでいるから、ゆっくり朝寝坊して現地のエステとスパで肌のお手入れ。結婚式は3日目がいいな」

手際よく結婚式の打ち合わせを行い、嬉々としてウエディングドレスを選ぶ美咲に「慣れているね」と思わず尋ねると、「最初の結婚式も海外だったのよ」と取り繕うような答えが返ってきた。やがて迎えた式当日、誓いのキスの後、牧師が結婚の成立を宣言した時、拓は天にも昇るような幸福感に包まれた。

◇ ◇

「二人だけの海外挙式なら披露宴を行う必要もないし、ハネムーン費用込みで100万円以下。日本で結婚式を挙げるより、ずっとリーズナブルでした。結婚のお披露目は年賀状と一緒にすればいいと考えたんです」

戸籍を確認したその日、肩を落とした拓が「金沢プライベート・リサーチ」を訪れ、放心したような表情で語った。市山が尋ねる。

「挙式費用と旅費は全額あなたが負担したわけね」

「ええ。派遣社員の彼女はかつかつの生活で、貯金はほとんどないと言っていましたから」

「それ以外で彼女に渡したお金はあるの？」

「東京から金沢の引っ越し費用として50万円を渡しました。交際期間中の交通費や宿泊費を負担したのも私です。婚約指輪と結婚指輪を含めて総額は200万円以上ですかね」

その口調はどこか投げやりだった。

「指輪はすでに換金されていると考えた方がいいわ。いずれにせよ、被害者はあなただけじゃないはずよ」

「美咲は結婚詐欺の常習犯ということですか」

「婚活イベントやお見合いパーティ、ネット婚活サイトに参加して、獲物を探していたのでしょう。ターゲットはあなたのような中年の独身男性。親の介護が心配な男性にとって、`親の介護をしてもいい、は殺し文句だったはずよ」

うつむいて顔を両手で覆った拓に市山が優しく声をかけた。

「あなたは結婚式を挙げることで、相手の女をすっかり信用してしまった。彼女は罪深い女ね。あなたをだましただけでなく、平然と神様の前で嘘を吐いているのだから」

◇ ◇

拓は結局、世間体をはばかって、警察に届けることはなかった。「会社に知られると笑い者になる」と久子には語っていたらしい。仮に被害届を出したにせよ、結婚情報サービスに登録した名前も住所も虚偽である可能性は高く、捜査は容易ではなかっただろう。

その後も拓は婚活を続けていたが、「おふくろに認知症の症状が現れ、婚活はいったん休止している」と当人から市山に電話があったのはそれからしばらく後のことである。市山と沙織が様子を見に行くと、会社を抜け出してきたとおぼしいスーツ姿の拓が久子に付き添って病院に赴いていた。

「サラリーマンが在宅で介護するのは大変。確かに婚活どころではないわね。介護が原因で仕事を辞めなきゃいいけど」

心配そうに独りごちた市山の傍らで、スマホを操作していた沙織が声を上げた。

「ちょっとおっさん、これ見てよ！」

インスタグラムのタグ付けで、美咲の氏名で検索してみたところ、タキシードを着た五十がらみの男性とともに写っているウェディングドレス姿の美咲にヒットしたのである。

「インスタに投稿したのはこの新郎さんよ。マウイ島の観光写真と一緒にアップされているから、ハワイで結婚したのね」

「投稿されたのはいつ？」

「今年6月よ」

「ついこの間じゃない！ ……なるほど、そういうことか」

腑に落ちたようにつぶやく市山に、沙織が問い返す。

「どういうこと？」

「この新郎さんとのハワイ挙式をあえてマウイ島で挙げた理由が分かったわ。日本人カップルが数多く海外挙式するオアフ島では、他の日本人と出会う可能性が高い。以前、依頼人の息子との結婚式を担当した`顔見知り、の牧師さんとも出会うかもしれない。だから、比較的日本人が少ないマウイ島を選んだのよ」

インスタに載った写真の美咲が着用しているのは、拓の結婚式とは異なるエンパイアラインのウェディングドレスだった。市山が付け加えた。

「この女、別の偽名でも海外挙式してるはずよ。そのつどタイプの違うウェディングドレスを着

楽しんでるに違いないわ」

その後、「美咲」と名乗った女の行方は杳として知れない。